

K-870

大塚天神古墳

第3次発掘調査概報

2001

山辺町教育委員会

おお つか てん じん

大塚天神古墳

第3次発掘調査概報

2001年3月

山辺町教育委員会



上空から見た大塚天神古墳



発掘調査風景



埴輪出土状況（Kトレンチ）

序 文

本書は、平成12年度に行った大塚天神古墳第3次査の概要をまとめたものです。

この度の調査は、文化庁から国庫補助をえて実施したもので、本年度より継続し14年度まで実施する予定であり、今回はその初年度にあたります。

平成8年度、平成9年度にそれぞれ第1次、第2次の大塚天神古墳の調査を実施してまいりました。

これらの調査の結果により、日本海側でもっとも北に位置する埴輪を持つ大塚天神古墳の概要が徐々に明らかになってきております。

山形盆地において古墳時代前期の集落の様相が開発による発掘で最近増加しているにもかかわらず、なぜか前期古墳が確認されなかった状況がありました。

大塚天神古墳はその謎を解く手がかりとなるのではないかでしょうか。

山形市本沢地区には、菅沢2号墳という巨大な円墳が存在しますが、わか町にもほぼ同規模の古墳が、それよりはるか以前に造営されていたことにあらためて感動を覚えます。

願わくばこの遺跡が、町民にとって自分の郷土を愛し、興味を持っていただくためのきっかけとなれば幸いです。

さらに、山辺町内ののみならず、山形盆地の古墳時代前期（4世紀）後半の様相の一端を知るための貴重な遺跡であると存じています。

山辺町内には、多くの古墳が造られておりますが、これらの古墳の中には山形盆地でも有数な古墳もございます。日本海側最北限の前方後円墳をもつ坊主窪古墳群と、同じく日本海側最北限の埴輪を樹立する古墳である当大塚天神古墳です。これらの事実は山辺町域が大和連合政権とエミシが境界を接する最前線にあたることを示しております。

そのような重要な地点であったため、埴輪の製作技法やプロポーションにみるような最先端の技術が中央より真直ぐに伝わったことでしょう。

最後になりますが、本書の刊行にあたり多大なるご協力をいただいた関係者と関係機関の皆様に対し深く感謝申しあげます。

2001年3月

山辺町教育委員会

教育長 高橋 達雄

例　　言

1 本書は山辺町教育委員会が平成12年度に実施した文化庁国庫補助事業による大塚天神古墳の第3次調査概報である。

2 調査要項は次の通りである。

遺跡名 大塚天神古墳

所在地 山形県東村山郡山辺町大字大塚字大塚 1133 番地 1 ほか

遺跡番号 OK 2 (山辺町) 平成 8 年新規

調査期間 平成 12 年 4 月 1 日～平成 13 年 3 月 31 日

現地調査 平成 12 年 9 月 19 日～平成 12 年 11 月 12 日

現地説明会 平成 12 年 10 月 31 日

調査面積 270 m²

調査目的 学術研究

時代 古墳時代

遺構 古墳 1 基

遺物 墳輪

調査主体 山辺町教育委員会

調査総括 山辺町教育委員会 教育長 高橋達雄

調査検討委員 小林三郎 (明治大学)、車崎正彦 (早稲田大学)、辻秀人 (東北学院大学)、加藤稔 (山形考古学会会長)、佐藤庄一 (山形県教育庁)、手塚孝 (米沢市教育委員会)

調査検討委員 (兼) 調査指導委員

川崎 利夫 (山形県立うきたむ風土記の丘資料館長)

茨木 光裕 (日本考古学协会会员)

調査担当 三浦 浩人 (山辺町教育委員会)

調査補助 高橋 玄寿 村山 賢司

調査作業員 伊藤重雄、伊藤豊、渡辺末吉、渡辺栄子、会田カネヨ、高橋一雄、久連山良夫、久連山八雄、小関トク、大内豊、後藤トミ、江口太平、長岡保信、佐野恒平、業田智行、秋葉洋志

整理作業員 鈴木裕美

事務局長 渡辺秀彦 (教育次長)

事務局次長 長谷川吉則 (社会教育主査)、

事務局員 武田一志 (派遣社会教育主事)、笠原 文 (社会教育係主任)、後藤礼三 (山辺町文化財調査委員長)、佐藤継雄 (山辺町文化財調査委員長代理)、鈴木利明 (山辺町文化財調査委員)

- 3 今回の調査にあたっては、次の方々より多大なるご協力とご指導をいただいた。
記して感謝します。
- 山形県教育庁社会教育課文化財課、財団法人山形県埋蔵文化財センター、阿古島功（山形大学教授）、小関忠右衛門・小関忠栄・小関忠（地権者）、大塚地区、大塚地区総代伊藤雄一、（株）武田組、国際航業（株）、（社）山辺町シルバー人材センター、黒坂雅人（（財）山形県埋蔵文化財センター）、菊地芳朗（福島県立博物館）、田中哲雄・北野博司・荒木志伸・松井敏也（東北芸術工科大学）、阿部明彦（山形県教育庁）
- 4 掘図の縮尺は不統一であり、その都度スケールを明示した。
- 5 本書の作成・編集・執筆は三浦浩人が担当した。
- 6 出土遺物、調査記録については山辺町教育委員会が一括保管している。

凡　例

- 1 本書の掘図中の方位は磁北を示している。
- 2 本書で使用した構造、遺物の分類番号は次の通りである。

S K … 土壌 R P … 土器・埴輪

目　次

序文

例言・凡例

目次、掘図・図版目次

第1章 古墳の立地する位置と環境

1 地理的環境	1
2 歴史的環境	1

第2章 これまでの調査状況と経緯

1 第1次調査	3
2 第2次調査と埴輪シンポジウム	3

第3章 調査の成果

1 調査方法	4
2 I トレンチ	4
3 J トレンチ	7
4 K トレンチ	8
5 L トレンチ	13
6 M トレンチ	13
7 出土遺物	13

第4章 まとめ	18
---------	----

報告書抄録	31
-------	----

挿 図

図1	圃場整備前の大塚天神古墳周辺	1
図2	大塚天神古墳とその周辺の遺跡	2
図3	第1次・第2次・第3次調査区設定図	3
図4	I レンチ平面図・土層断面図	5~6
図5	J レンチ平面図・土層断面図	9~10
図6	K レンチ平面図・土層断面図	11~12
図7	L レンチ平面図・土層断面図	15~16
図8	M レンチ土層断面図	17
図9	大塚天神古墳推定図	20

図 版

卷頭図版1	上空から見た大塚天神古墳	
卷頭図版2	発掘調査風景・埴輪出土状況 (K レンチ)	
図版1	I レンチ (左) と J レンチ (右) K レンチ	21
図版2	L レンチ M レンチ	22
図版3	S K 1 の状況 I レンチ埴輪出土状況	23
図版4	I レンチの境麗線 I レンチサブレンチ土層断面	24
図版5	J レンチ埴輪出土状況 J レンチほぼ埴輪をとり上げた状況	25
図版6	K レンチサブレンチ状況 M レンチ状況	26
図版7	M レンチ版築の状況 調査検討委員会	27
図版8	埴輪出土状況	28
図版9	出土した埴輪	29
図版10	M レンチ剥き取り土層断面	30

第1章 古墳の立地する位置と環境

1 地理的環境

山形盆地は、奥羽山脈を出羽山地（白鷹丘陵）との間にある内陸盆地である。

盆地は南北約35km、東西約15kmで、南北に細長い盆地となる。盆地東側の奥羽山脈は、藏王連峰を含む急峻な地形となるが、西側の出羽山地は起伏の少ない丘陵、台地の地形である。盆地東側は、馬見ヶ崎川、立谷川、乱川などの規模の大きい扇状地が分布するのに対して西側は顕著な扇状地は見られず、里山を源として流れ出す「沢」と呼ばれる中小の河川が小規模な浸食を行う程度である。藏王連峰を源とする酸性の強い須川は盆地内を南から北へ流れ最上川に合流する。

大塚天神古墳は、その須川左岸の後背湿地、（氾濫原）を望む段丘崖に接した台地縁辺部の突端である微高地に位置し、標高は約110mを数える。

2 歴史的環境

大塚天神古墳のような塚が、以前は5基ほどあり、開発により消失または削平され、現在塚状のものは、大塚天神古墳しか残っていないといわれている。

伝説では、一旦雨が降ると、すぐ洪水になり土地が削られてしまうため大きな塚を築き、その上に天神様を祀って祈願したと伝えられる。

また、付近には後明沢と須川の囲まれた、段丘に立地する大塚遺跡とよばれる集落跡がある。出土遺物の特徴から4世紀後半から5世紀初頭の集落跡であると推定される。

古墳の北部一帯には条里制遺構である山辺南部条里が存在する。8世紀後半から9世紀にかけての水田遺構が県教育委員会の調査で確認されている。さらに古墳の西側には根際古墳が、須川対岸の山形市志戸田には去手路古墳があり、ともに石材が残っている。これらは、この一帯が古くから開発が行われたことを示している。



図1 園場整備前の大塚天神古墳周辺

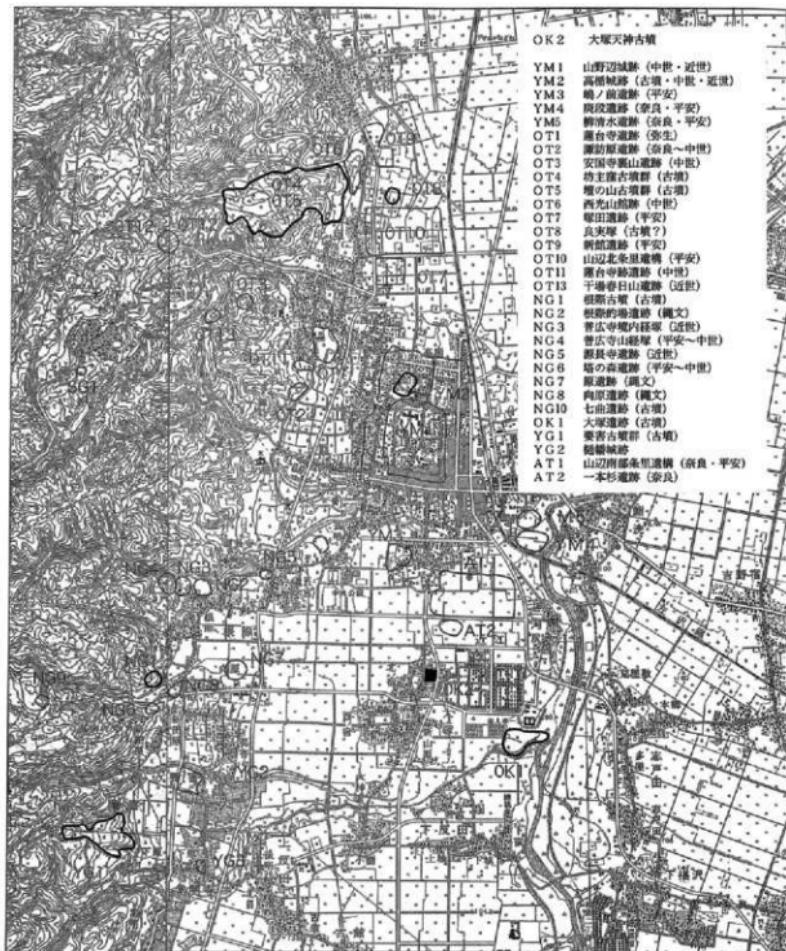


図2 大塚天神古墳とその周辺の遺跡

第2章 これまでの調査状況と経緯

1 第1次調査

第1次調査は平成8年に実施したもので、現墳丘面の西側に対して4本のトレントを設定している。その結果現墳麓部から、どのトレントでも10m西側に離れた地点で、地山を削り出した落ち込みを検出した。さらにその落ち込みのラインを中心として多量の埴輪片が出土した。落ち込みは古墳の周りを取り囲む周溝であると考えられ、周溝の幅は15m以上か若しくは周溝がない可能性が考えられた。また、墳麓部に設定したサブトレントから、後世なんらかの理由で墳丘を削り出していることが確認できた。本来は現墳丘が上段となり、現在遺構で確認出来るよりも高さを有する、下段を持つ2段築成の古墳であると考えられた。以上のことから埴輪を有する古墳としては、日本海側最北限の古墳であり、直径50m規模の円墳であることが推定された。

2 第2次調査と埴輪シンポジウム

第2次調査は平成9年に実施した。墳丘を中心とした調査であった。上段目と下段目の間には平坦面（テラス）があったと推定され、現墳丘東南斜面からは2.6m幅のテラスと推定される部分が検出され、またテラス部分には埴輪の据付痕か抜き取り痕と思われる堀り込みが確認されている。ほぼ1.1m間隔で樹立したと推定している。また同年11月の2日間、埴輪シンポジウム実行委員会が中心となり、山辺町教育委員会、山形県考古学会により山辺町で埴輪シンポジウム開催された。県内外の研究者8名が参加して行われ、大塚天神古墳出土の埴輪は、野焼き焼成による黒斑や外側調整での二次調整タテハケ、内側調整でのケズリ、透かし孔の円形などの理由から川西宏幸氏（現つくば大学）編年の第2期であるとの意見で一致した。

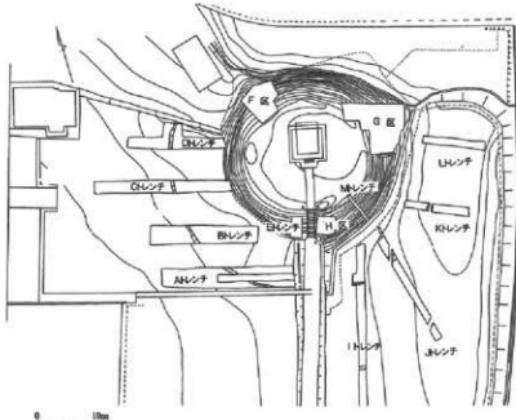


図3 第1次・第2次・第3次調査区設定図

第3章 調査の成果

1 調査方法

今回の調査は墳丘東側の天満神社参道とほぼ同じ方向に、水田面に東西のIトレンチ（現場の時点ではIII Aトレンチ。以下 I トレンチという。）を設定した。さらに古墳が円墳である可能性もあることから、現墳丘上に仮の中心点を設定してその点に対して放射状に南東部に対し J トレンチ（現場の時点ではIII Bトレンチ。以下 J トレンチという。）を設定した。また、K トレンチ（現場の時点ではIII Cトレンチ。以下 K トレンチという。）は J トレンチと同じように、現墳丘上に仮の中心点を設置し、その点に対して放射状のトレンチを行う予定だったが、所有者の今後の水田管理上のことも考慮し、方向を南にずらし、必要最初限度のトレンチ幅を設定し、墳頂部平坦面の南端に対してトレンチが向くようにした。また、L トレンチ（現場ではIII Dトレンチ。以下 L トレンチという。）も K トレンチと同じように所有者の今後の水田管理上のことも考慮し、方向を北にずらし、必要最初限度のトレンチ幅を設定した。墳頂部平坦面の北端に対してトレンチが向くように設定し、かつ K トレンチと L トレンチがパラレルとなるようにした。

現在も水稻を耕作しており、その後の耕作に支障がないようにするための対応が必要なため、トレンチの調査区設定も難しいものとなった。

さらに J トレンチの上、墳丘自体にもトレンチを設定し、東北芸術工科大学の協力を得て、断ち割った断層の剥ぎ取りをおこなっている。M トレンチある。現在当町大門の文化財収蔵庫に収めている。

2 I トレンチ

I トレンチは、天満神社参道東側沿いに設定した南北の幅 1 m 60cm、長さ 38.8 m のトレンチである。現在の水田面を北側においては 60cm ほど掘り下げると、ブロックの混じる若干明るい褐色の層が確認できる。墳丘と思われる。当初この層の東側から「く」の字型に曲がる土層の違いを確認し、あるいは前方後円墳のくびれ部か検出されたのかとの推測もあった。ただし、この土の変化は最近の農業用水路の配管埋設工事により掘られた跡であることが判明した。

その結果、I トレンチでは、墳丘の半分が破壊されていることがわかった。

このため、墳丘から周溝を落ち込む地点について、2 m × 70 cm 程度西に調査区を拡張し、埴輪の検出状況と、墳丘の状況の確認につとめた。

埴輪については、第1次調査の出土状況と同様に、周溝の始まる落ち込み部分に埴輪が折り重なるような形で確認できた。

さらのその部分にサブトレンチを設定し、この墳丘が地山を削り出したのか、積み土により形成したのかの検討をおこなった。その結果、基本的に地山起源の褐色と黒色の互層をしめし、積み土による版築を行っていることが確認された。とくに周溝近くの面では斜めに積み土を行い、墳丘を固めている。墳丘上面から周溝床面までは 35 cm 前後の高低差を計る。

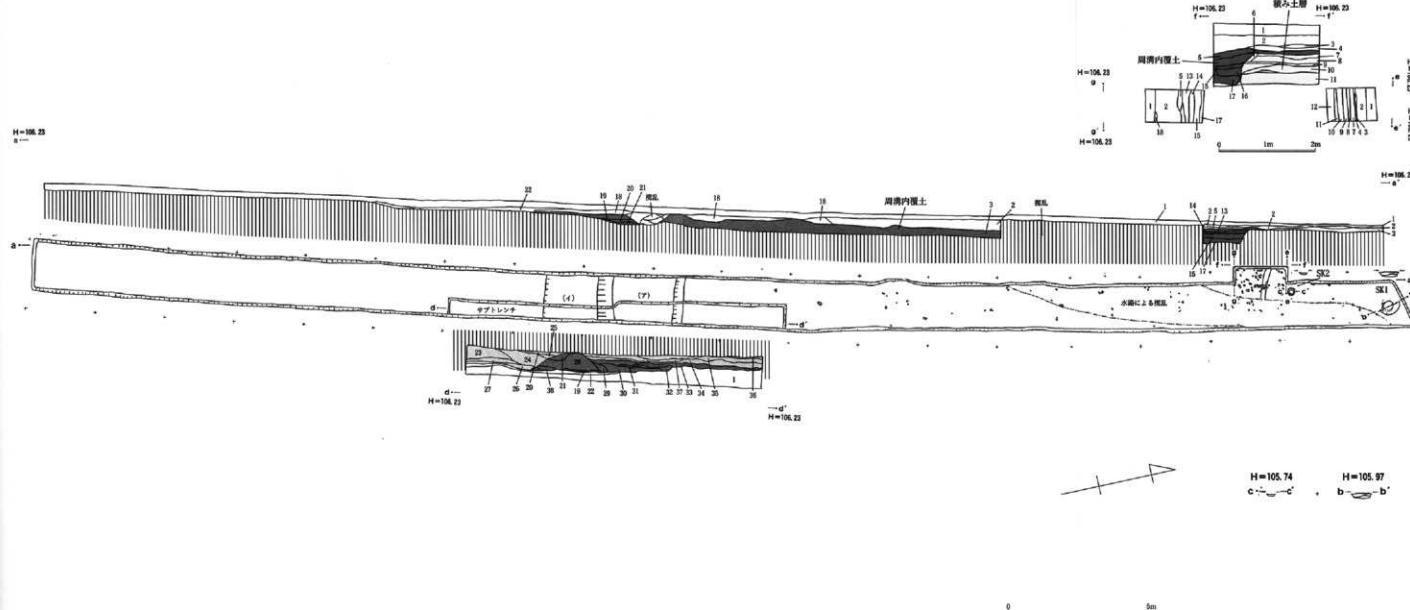


図4 I トレンチ平面図・土層断面図

第1次調査の墳丘部分が薄い積み土一層のみを貼って、その下ほとんどは地山を削りだしで形成しているのに対し、東部では、積み土及び版築により丁寧に墳丘を形成しており、対照的である。このことを説明する仮説としては、古墳を造成する以前の地形が現在の墳丘から西部、もしくは北西部が高くなってしまっており、造成する際、西側は地山を削り出し、東南部は逆に盛土をおこなった可能性を示しているといえる。

黒色シルト層は、周溝の始まる1m手前位からはじまり、周溝全体の上部に見られる層である。埴輪片の多くが、ほぼその土層中より検出される。このことは、周溝がある程度埋まってから埴輪片が周溝に落ちていったと思われる。

周溝床面に出土する埴輪片はごく僅かであり、小片が多く、当初から現位置に存在したとは考えづらい。

周溝の立ち上がり部分（外堤）の確認については、明確な立ち上がりではなく、周溝の始まる地点から13m90cmの地点（ア）で周溝床面から10cm程度立ち上がる。さらにその南側16m80cmの地点（イ）まで南側に若干の高まりが続いているのが終了し、現耕作土まで10cmにもみたない、しまった褐色土にうつる。

当初、（ア）の地点が周溝の立ち上がりではないかと推定し、その2地点をつなぐサブトレレンチを設定した。その結果、（イ）の地点でレンズ状に堆積する明るい褐色を呈した礫層が確認された。この礫層は洪水などのために一度に流れ込んだものであると思われ、その層の上下及び北側に礫混じりの暗い褐色の砂層が確認できた。

このことにより、周溝（外堤）の立ち上がりは（イ）の地点であると推定された。立ち上がり（外堤）はグラグラと長い形となるが高低差は50cmから60cmを有する。

以上の結果、Iトレレンチでは上面で16m90cm、床面では13m90cmの周溝幅を持つことが確認された。なお、周溝の始まりから北へ1m80cmのところに、直径30cm、深さ5cmの土壤SK2が、同じく北4m10cmのところに、直径39cm、深さ18cmの土壤SK1を検出した。SK1からは、円筒埴輪の基底部も検出され、埴輪の据付痕であると推定される。

3 Jトレレンチ

Jトレレンチは、現墳丘の仮の中心点に向かって水田面に設定した東南のラインの、幅1.6m長さ23.5mの調査区である。北側では現水田面から70cm程度下げるとき、墳丘と思われる層があらわれる。ただ残念ながらトレレンチの北部にはIトレレンチより続く農業用水の配管埋設工事により搅乱がみられる。また途中2箇所にわたって暗渠排水が南北に通る箇所があった。当該箇所は周溝の落ち込みのラインと周溝の立ち上がり（外堤）の部分にかかるため、周溝規模の確認については検討を要した。

まず、北側の暗渠排水付近の西側の土層の断面を確認し、版築が行われ、墳丘が下がっていくことを確認した。また、Iの黒色シルト層と同一の層が始まっていることも確認された。さらにはその東側からは黒色シルト層中の比較的上面を中心として、多量の埴輪片を検出した。黒色シルト層は若干のレベルを下げながら、周溝面の上層につながっていく。

この北側暗渠排水南側の西側にサブトレレンチを設定した。幅50cm長さ3m50cm程度である。

周溝の床土は I トレンチと同じで 10cm から 20cm 堆積したシルト層（検出してまもなくは褐色をしているが、時間の経過とともに暗い灰褐色に変化する）で、その下深さ 40cm まで下げるみたが、砂層が 3 層検出されただけであった。とくに最下層の砂は固くしまった砂層であり、その下を検土杖で確認した。荒い砂層のため 60 センチ（周溝の床面からは 1m から 1m 10cm）下までの地点しか確認できなかったが、荒く締まった砂層が確認されている。以上のような状況から、周溝の床面は周溝を形成する際に削平された可能性はあるものの、その下層は古墳を造成する際も動いていない状況を確認した。基本的に周溝床面は若干の成形を行っており、その上の墳丘部分については積み土であろうと判断した。

また南側暗渠排水の部分についても、周溝の立ち上がり（外堤）を確認するために幅 50 cm 長さ 5 メートル程度のサブトレンチを実施した。その結果、I トレンチと同様の明るい褐色を呈した 3cm を中心とした疊層の厚い堆積が確認された。I トレンチとほぼ同じ時期に洪水などのために一度の流れこんだものと推定した。ただし、この J トレンチの北側のサブトレンチと明確に違うのは、南側サブトレンチの疊層下より、明るい黄褐色をしたゆるい粘土の層が確認されたことである。南側暗渠の南部分はほぼすべて明るい黄褐色をしたゆるい粘土の層となっている。この部分に検土杖を挿入して確認したが、この層の検出されている高さから、すくなくとも約 80cm 下まではゆるい粘土層が続いている。黒色シルトが、疊層と粘土層の間に入り込んでいることを考慮すると、J トレンチの周溝の立ち上がり（外堤）はこのゆるい粘土層であると思われる。疊の堆積状況からみても、この粘土層により周溝の立ち上がり（外堤）を成形していると考えられる。立ち上がり（外堤）の高さは約 40 cm である。周溝の幅は上面で 15m 30cm 底面で 13m 40cm となる。

なお、南側暗渠の南部分のゆるい粘土からは直径 11cm 深さ 12cm のピットが確認されている。

4 K トレンチ

K トレンチは天溝現墳丘の東側に設定した、幅 1.6m、長さ 12m 50cm の調査区である。この調査区も暗渠排水の施設があり、その部分を残しての調査となつた。また、西の端が農業用の水路の配管埋設工事のため搅乱されているが、それ以外は非常に良好な保存状況となつてゐる。この調査区では、比較的の墳丘面に接した形で埴輪片が出土する例が、他のトレンチと比べて多い。現水田面から 70cm ほど下げるとき、I、J トレンチで確認されたと同様の墳丘面を確認できる。西端から 3m 50cm 東の地点より周溝の落ち込みははじまる。

他の地点では、周溝の始まりの確認が搅乱などのため不明瞭な形となつてゐるが、このトレンチでは、明瞭に曲線を描いて周溝がめぐることが確認できる。墳丘から周溝までの高さは 30cm である。この調査区でも幅 40cm、長さ 1m 10cm のサブトレンチを設定し、墳丘の積み土及び版築がなされているか確認した。ブロックを含む黒色粘土層を周溝の付近で一度削り出し、その上に I、J トレンチで確認された周溝の床面の土を積んで、さらに黒色の土を積み、他と同じ用にブロックの混じる若干明るい褐色の土で墳丘を形成していることを確認した。

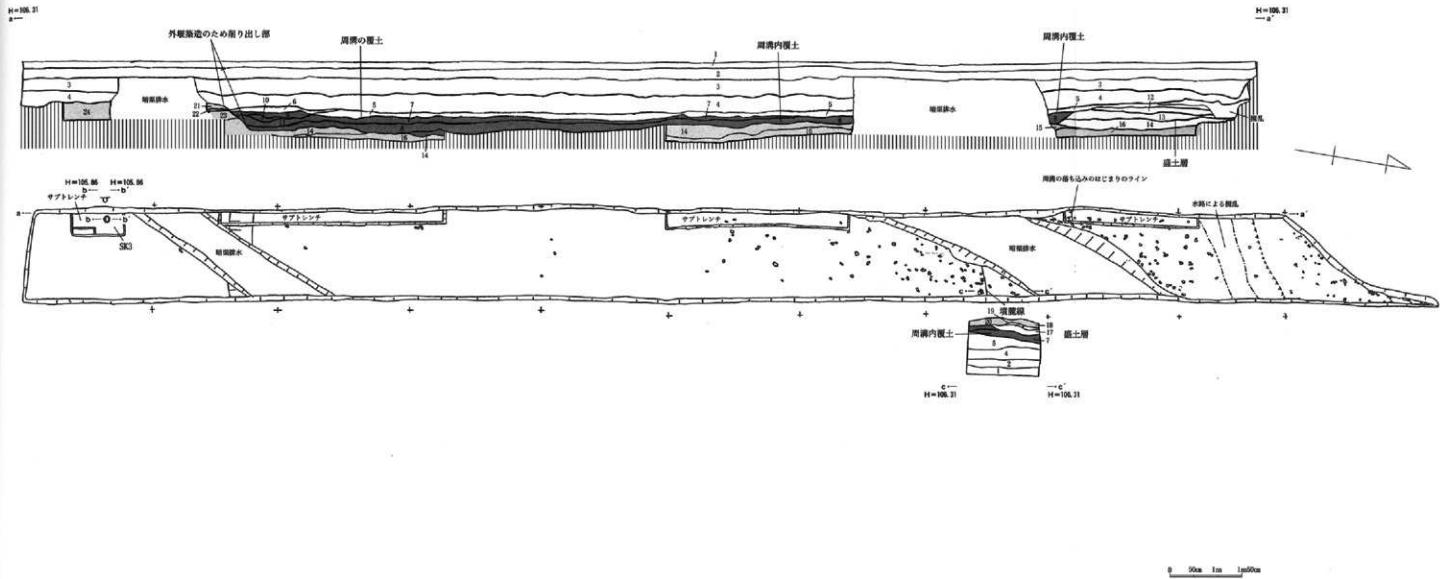


図5 Jトレンチ平面図・土層断面図

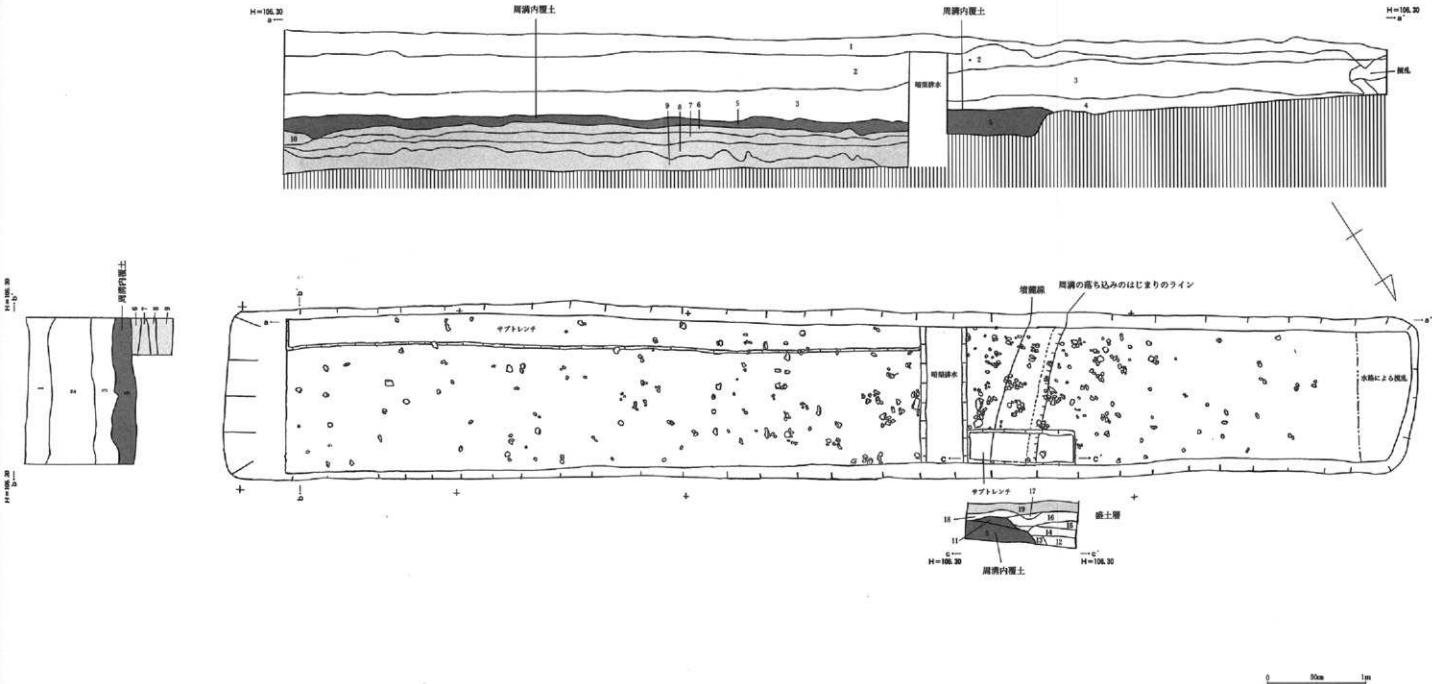


図6 Kトレンチ平面図・土層断面図

さらに暗渠排水の施設東側の南端に40cm幅のトレンチを設定し、土層の確認につとめた。基本的には水平な堆積をしめしており、周溝の床面より下は動いていない状況であった。

また、比較的大きな礫の層も確認できるが、I、Jトレンチの礫の層とは明らかに違う層であった。周溝の立ち上がり（外堤）はトレンチ設定の都合上確認できなかった。あるいは、現国道をつくる際に削平されたのかもしれない。（なお、航空写真撮影前日に雨のため東側の南壁が崩れた結果、図版と実測図のトレンチの形が合わない形となっている。）

5 Lトレンチ

Lトレンチは天満神社の東部に位置し、当該箇所は水田であるが、あと10数mで畑面となる場所にあたる。調査区の範囲は幅1.5m長さ12mである。この調査区は非常に遺物（埴輪）の出土が少ない。暗渠排水の施設が、東西2箇所にあり、その場所を除いての調査となった。西面で現水田面から70cm、東面で現水田から90cm下に、地山と推定される層を確認した。このトレンチは周溝と思われる落ち込みもなく、サブトレンチでも一部に薄い砂層がはいるが、基本的には風化した礫が平坦な形で一面に広がる形となっている。色調は明るい褐色で、上面を削り新たな面を出すと最初青みがかった色であったものが、徐々に空気に触れて黄色味を増すようになる。このトレンチ部分については盛土をおこなった様子は確認できなかった。I、J、Kの各トレンチの墳丘部の上に張っている土は、この地山の土を使用して盛ったものと思われる。また西端からは埴輪据え付け痕と思われるSK4が検出されており、中から埴輪の基底部が出土している。

いずれにしても、このトレンチ部分から周溝が確認できなかったということはどういう意味を持つか、後で考察する。

6 Mトレンチ

Mトレンチは、Jトレンチから現墳丘斜面に対して、設定したトレンチである。50cm幅で墳丘を断ち割った形となった。下に黒色シルト層があり、その上に礫混じりの褐色層が入り、更に互層状に、黒と褐色の層が交互に繰り返されている。いわゆる版築が行われている。基本的には、下層の黒色シルト層とLトレンチでみられた地山の褐色層を用いていると思われる。さらに、黒色の層はドーナツ状というか、現墳丘の外側に行けば行くほど上に向けて厚くなり、墳丘の崩落などを予防する措置がとられていたことがわかる。なお、上部は神社の行事による焚き火などをした場所であるため灰が堆積しているが、一部に二段築成の古墳であった可能性を示す土層の変化もみられる。

先に述べたが、図版10の通り、土層の剥ぎ取りも行っており、二段築成の古墳であるかどうかの結論は、今回以降の調査により解明する必要があると考えている。

7 出土遺物

今回出土した遺物は円筒埴輪と朝顔型埴輪及び土師器である。整理用コンテナで22箱が出土している。

第1次調査の際には少なかった朝顔型の埴輪片も比較的多く出土している。

現在整理中であるため、その概要のみを報告する。

まず、透かし孔はすべて円形となる。また、多くが黒斑を有し外面調整は2次調整タテハケを用いており、内面調整はほぼヨコハケを主として一部にはタテ方向のケズリもみられる。

突帯は、埴輪外面に一定の間隔で取り付けられる突起状の帯である。断面でみると、角部分が突出化、鋭角化している形状と、角の突出がやや弱くなり台形の形状をしているもの大きくわけて2種に分けられる。また、基底部の底面には凸凹の痕跡が残っており、底部の調整は行われていない。

以上のことから、第1次及び第2次調査で出土した埴輪と同じ埴輪であることが確認できる。川西編年II期に該当する。また、土師器はMトレンチの表土下層から出土しているが、小片のため時代を特定するにはいたらなかった。

なお、埴輪についての考察については、後日まとめる予定である。

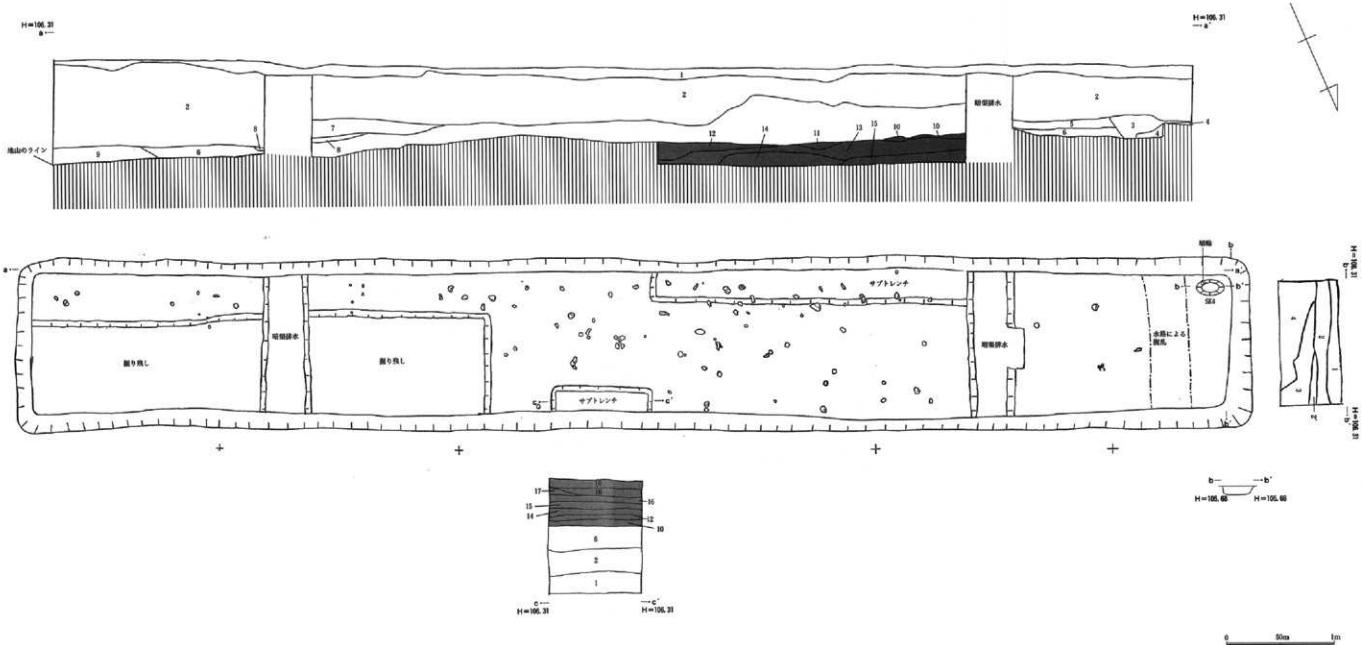
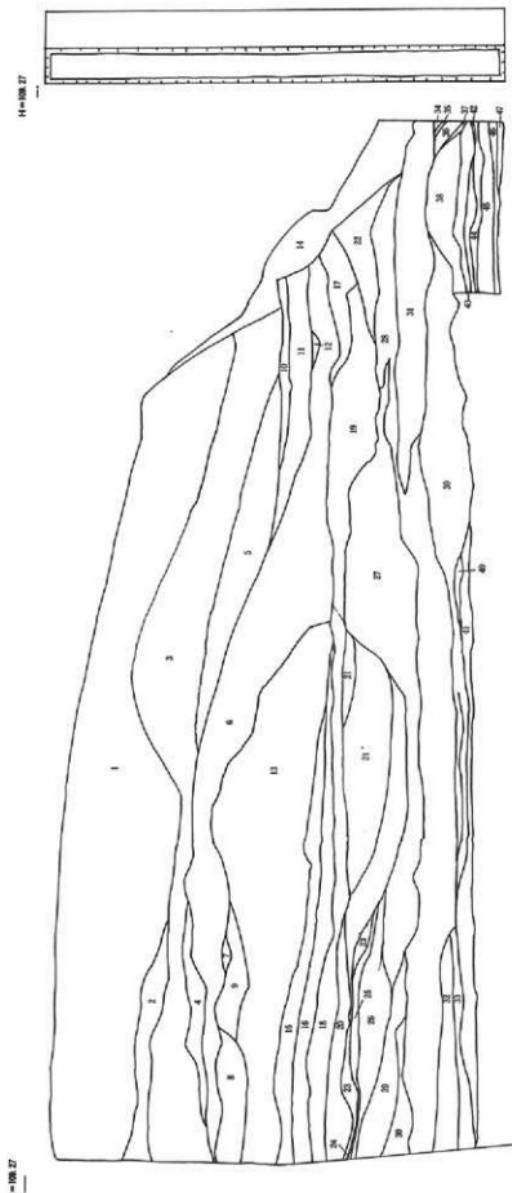


図7 しトレンチ平面図・土層断面図

図8 Mトレインチ土壌断面図



第3章 まとめ

1

大塚天神古墳は今回の調査を含めて3次に及ぶ調査がなされた。出土している埴輪は川西編年II期にあたるもので、4世紀後半の年代が与えられ、埴輪はほぼ円筒埴輪と朝顔形埴輪しか出土していないことや、二段築成の古墳である可能性があることなどがわかっている。

今回第3次調査では、現墳丘の南から東南側に周溝がめぐることが判明した。

上面で15m 30cmから16m 90cm、底面で13m 40cmから13m 90cmである。第1次調査を実施した現墳丘西側では周溝の幅とその立ち上がり（外堤）を確認できなかったが、周溝が東南部から南部及び西部にかけてめぐることになると思われる。また、第1次調査では確認できなかった埴輪の据付痕もしくは抜取痕と思われる土壙を確認している。第1次調査の結果、検出した地表面下の下段部分の墳丘は後世に削平されていることが判明している。墳形を考慮すると今回の調査では確認できなかったが、東側についても削平されている可能性が考えられる。とすれば、埴輪の据付痕もしくは抜取痕と思われる土壙より現墳丘側が削平されたのであろうか。今回の調査では、その事実は確認できなかった。確実なことは、墳丘の外側には埴輪をめぐらす平坦なテラスが周囲にめぐっていたことであろうと思われる。

また、第1次調査で確認した現地表面下の墳丘は、地山を削りだして形成しているのに対し、今回の調査で確認した現地表面下の墳丘は、積み土によって形成されていることが確認された。

2

Lトレンチで周溝が確認されなかったことは2つの可能性が考えられる。

1つは、Lトレンチの部分が陸橋（ブリッジ）であったということである。周溝部分から土を採取し、墳丘へ盛土するための道や、墓道、祭祀を行うための道、もしくは古墳を管理するための道などの例が考えられる。各地の古墳でも、多くの陸橋（ブリッジ）の発掘例が知られている。2つ目は近藤義郎氏の論文等では、前方後円墳のくびれ部分から後円部にかけての高まりを「隆起斜道」（前方部から墓道を通って主体部へと行く道）とよんでいるが、Lトレンチはその下段の削平された残欠部分である可能性である。現墳丘北東部に存在する尾根上の地形よりの推定である。この場合、前方部は削りとられたということになると思われる。

なお、今までの見解としては陸橋（ブリッジ）と考える方が合理的と判断し、直径51mの円墳であると考えている。

3

以上の結果を照合すると、大塚天神古墳は直径51mの円墳となる。これは、山形市音沢古墳と同規模の古墳であり、山形盆地で最古級の古墳となる。また墳丘のまわりを周溝がめぐるため、直径80m程度のプランにより古墳が造営されたことになる。

いずれにしても大変畿内的な埴輪を持つ大塚天神古墳は大和連合政権と密接なつながりを

持つ者を埋葬した古墳であり、町民の文化遺産として大切にしていかなければいけないと思われる。

なお、最後になりましたが、泥まみれになりながら作業を行ってくださった作業員の皆様に心より感謝申しあげます。

参考文献

- 『坊主窪古墳1号墳予備調査報告書』1989 山辺町教育委員会
- 『菅沢2号墳発掘調査報告書』1989 山形市教育委員会
- 『大塚天神古墳第1次調査概報』1997 山辺町教育委員会
- 『大塚天神古墳第2次調査概報』1999 山辺町教育委員会

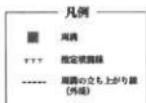
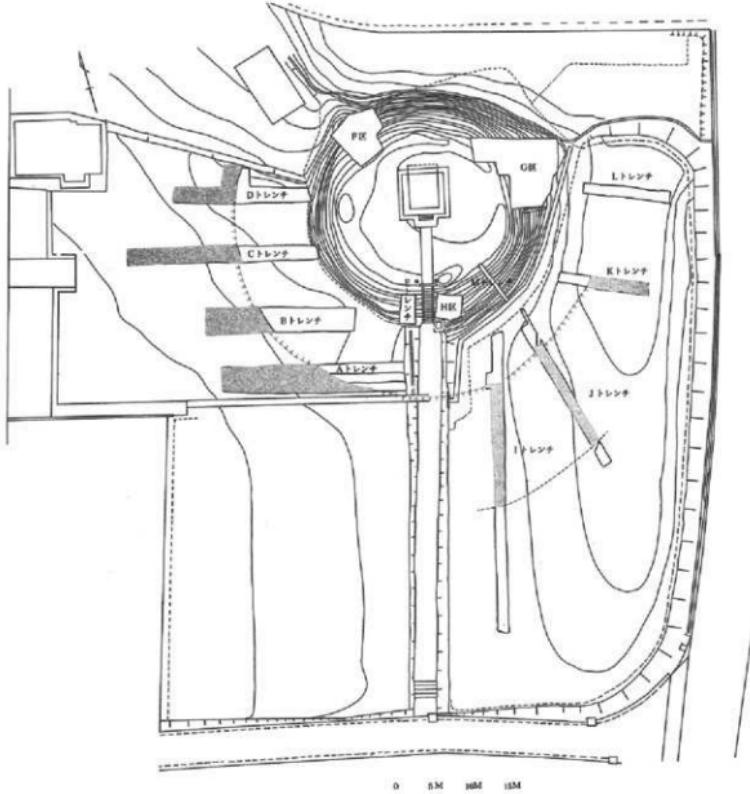
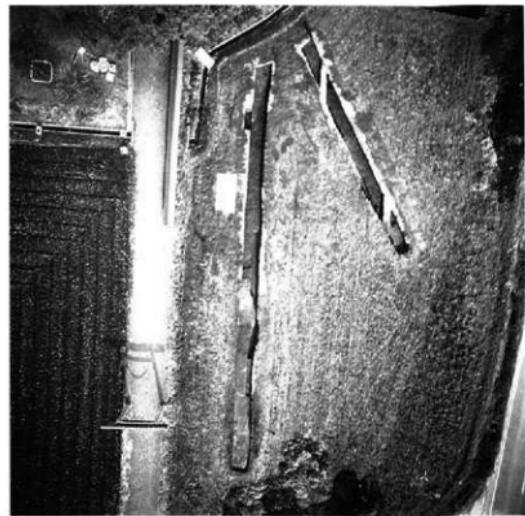
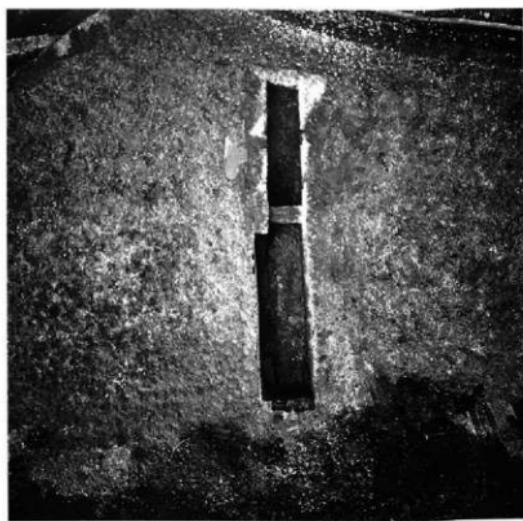


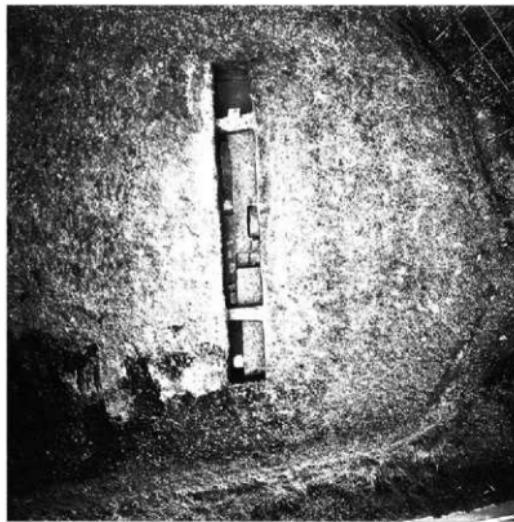
図9 大塚天神古墳推定図



Iトレンチ（左）とJトレンチ（右）



Kトレンチ



Lトレンチ



Mトレンチ

図版3



SK I の状況（右側は掘りすぎ）



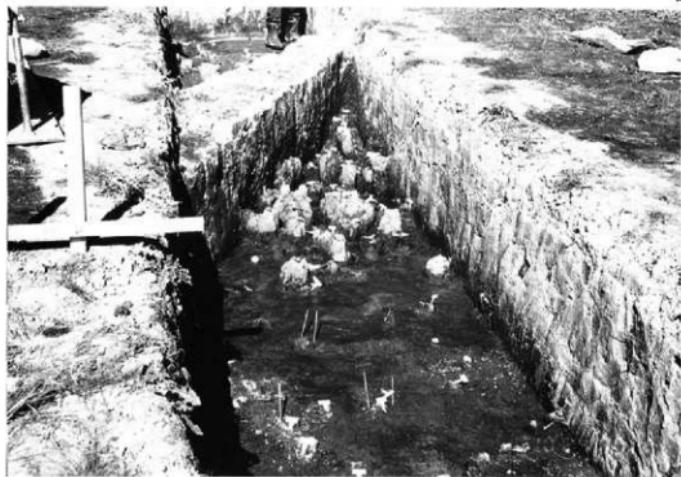
I トレンチ埴輪出土状況



トレンチの埴籠線と埴輪出土状況



トレンチサブトレンチ土層断面（積み土の状況）



Jトレンチ埴輪出土状況



Jトレンチほぼ埴輪をとり上げた状況



Kトレンチサブトレンチ状況



Mトレンチの状況

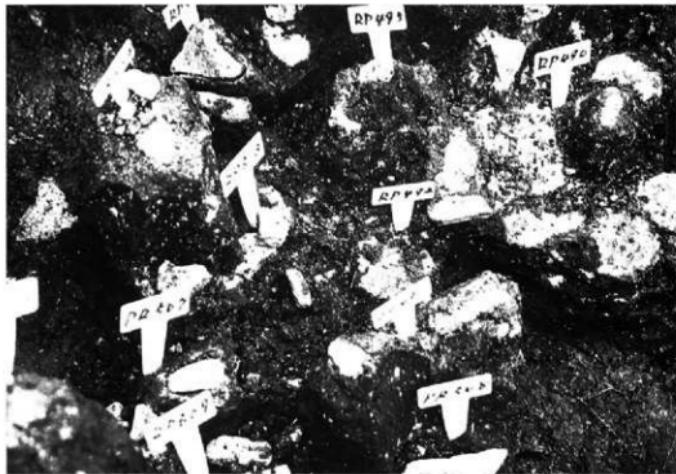
図版7



Mトレンチ版築の状況



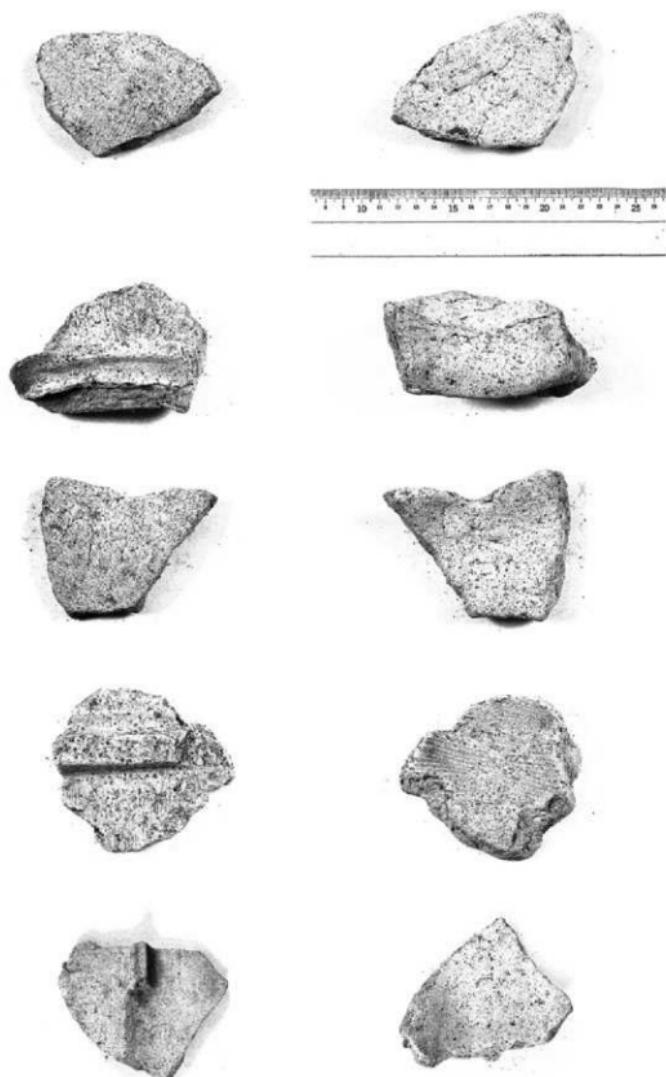
調査検討委員会



埴輪出土狀況



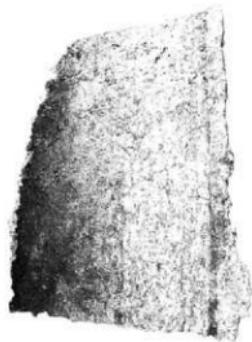
埴輪出土狀況



(裏)

(表)

出土した埴輪



Mトレンチ剥ぎ取り土層断面

報告書抄録

ふりがな 書名	おおつかてんじんこふんだいさんじはくつちょうさがいほう 大塚天神古墳第3次発掘調査概報							
副書名								
卷次								
シリーズ名	山辺町埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第10集							
編著者名	三浦 浩人							
編集機関	山辺町教育委員会							
所在地	〒990-0392 山形県東村山郡山辺町緑ヶ丘5番地							
発刊年月日	平成13年3月31日							
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
大塚天神古墳	山形県 東村山郡 山辺町 大字大塚字 大塚1133番 地の1ほか	6301	山辺町遺 跡番号 OK2 平成8年 度登録	38° 16' 43"	140° 16' 13"	20000919 ～ 20001112	270m ²	学術調査
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
大塚天神 古墳	古墳	古墳時代 前期	周溝 埴輪据付痕	埴輪 (円筒埴輪・朝顔 形埴輪)		埴輪を持つ古墳と しては、日本海側 最北限の古墳であ り、山形盆地でも 類例の少ない前期 古墳である。		

大塚天神古墳第3次発掘調査概報

山辺町埋蔵文化財調査報告書第10集

平成13年3月31日

編集 山辺町教育委員会

発行 山辺町教育委員会

〒990-0392 山形県東村山郡山辺町緑ヶ丘5番地

電話 023-667-1115

印刷 藤庄印刷株式会社

〒990-0821 山形県山形市北町1-3-1

電話 023-684-5555
